

向い山に咲く花

－日本の歌謡と中国の少数民族彝族の歌謡とにおける花の表現－

飯島 一彦

A flower blooming at the mountain over there
－Representation of flowers in Japanese songs and
Chinese ethnic minority Yi-race songs－

IJIMA Kazuhiko

In Japanese literary tradition, when allegorizing women to flowers, the flowers are often cherry blossoms. However, an exceptional case is allegorize to women as azaleas in the Cho-ka (長歌) of *Kakinomoto-no-hitomaro* (柿本人麻呂) of “*Manyo-shu* (万葉集)”. But, there are no examples after the Heian period, the flowers as allegorizing to woman become cherry blossomes.

So, you can see a few examples that paraphrases a woman as azaleas in the tradition of Japanese folk songs in the modern era, although the number is very small.

Yi-race (彝族), one of the ethnic minorities in China has a culture to cherish alpine azaleas, and they have a representation tradition that paraphrases the beauty of women to azaleas. The reason why there is a common way of metaphor for the cultures of Japan and Yi-race may be because both peoples have a life in mountainous areas.

1 花と桜の表現伝統

咲いた桜になぜ駒^{こま}つなぐ、駒が勇めば花が散る

これは江戸時代初期から記録に残り¹、その後ずっと伝承され、現在でも記憶されている² 著名な日本の歌謡である。歌謡と言っても宮廷歌謡等の上流階級のもてあそぶものではなく、いわゆる俗謡である。あるときは紅燈の巷で、あるいは野良の労働で、はたまた盆踊りで歌われた種々様々な歌謡の歌詞として採用されて、歌われ続けてきたものである。

この短い歌詞表現の中に、花と言えば桜であり、若い女性を暗示するという、日本の古くからの文芸的表現伝統が忠実に生かされている。むろんここでは駒（もともと若くて勢いの良い馬を指す呼称である）は若い男性を暗示している。その二つの暗示から、「花が散る」という表現が若い男女の交情を（突き詰めると破瓜を）暗示していることは明白である。

花と言えば桜、そして若い女性の暗喩という表現の淵源を探ると、『古事記』のいわゆる天孫降臨の段で瓊瓊杵尊が出会う木花開耶姫に行き着くというのは国学的な態度であろうが、残念ながら木花開耶姫は『古事記』においては花の神であり短命と豊穰の象徴ではあり得ても、桜と直接結びつく徴表を見出すのは難しい。桜と若い女性が直接結びつけられた表現を見出せるのは『万葉集』（8世紀末頃成立）である³。

昔、娘子^{をとめ}有りけり。字を櫻兒と曰ふ。時に二の壮子^{をとこ}有りて、共に此の娘を詠^{あは}ふ。

（中略）

両の壮子、哀慟血泣に敢へず、各心緒を陳べてよめる歌二首

-
- 1 『延宝三年書写踊歌』（1675年写）『淋敷座之慰』（1676年成立、寛永年間（1624-44）以来の流行歌謡を収録したもの）『落葉集』（1704（元禄17）年刊）『延享五年小哥しゃうが集』（1748写）『山家鳥虫歌』（1772（明和9）年刊）等々の歌謡書に歌詞が載せられる。現代伝承されている都々逸の代表的歌詞でもあり、長い期間にわたって人口に膾炙した歌詞である。
 - 2 司馬遼太郎の小説『竜馬が行く』にもこの歌謡が引用された。馬肉のことを桜と称するのは、実はこの歌謡があるからという説もある。
 - 3 訓は新日本古典大系『万葉集』と西本願寺本を参考に私に施した。以下同様。

春去らば挿頭かざしにせむと吾あが思おもひし桜の花は散りゆけるかも

妹が名に懸けたる桜花ちらば常にや恋ひむいや年のはに
(巻第16、3808・3809)

二人の男性が一人の女性を争い、それを歎いた女性が自死を選び、残された男性が嘆きを歌うという話柄で、特に日本に限った話型ではないが、ここにはすでに「花が散る」が女性の死を暗示するという比喩が成立している。次の近世歌謡でも右の万葉歌と同様の構図で表現が成立しているのは、一つの驚きと言っても良いのではないか。

花は一枝折り手は二人、わしはどちらへ靡こやら（『山家鳥虫歌』大和）

もっともこの歌謡の場合は歌う主体は女性であって、恋の主導権を握っている風であり、また女性の死が約束されているわけでもない。ただ、「どちらへ靡こう」という迷いは「花が散る前に」という黙契を伴っているのは確かである。散る前に折手を選ばねばならないのである。そういう点では、「花＝桜」は「散る＝死」という比喩が前提として存在する表現である、ということになる⁴。

『万葉集』には桜の他に藤の花を女性に譬えた表現が見える。

かくしてそ人の死ぬといふ藤波のただ一目のみ見し人ゆゑに
(巻第12、3075)

藤波は藤の花が咲き広がる景をさして言う。しかし、ここで死のイメージを背負うのは女ではなく、恋う男である。藤は『藝文類聚』（唐代初期、624（武徳7）年に歐陽詢らが高祖の勅を奉じて撰した類書）の部立の子目の一つとなっており、この和歌も中国趣味で詠まれたものかもしれない。『万葉集』には藤を扱った歌は多数あり、他にも数多くの花が取り上げられている。

ただ、「花」という語がもっぱら桜を意味し、それが女性と死（もしくは恋の終焉）が関連するイメージの表象として扱われるようになるのは『古今和歌集』（905（延喜5）年成立）からである。文芸伝統としての「花＝桜」が確立

4 もちろんこのような文芸伝統が梶井基次郎の『桜の樹の下には』や坂口安吾の『桜の森の満開の下』等に繋がっているのは言うまでも無い。

したと言って良いのだろう。枚挙に暇が無いので、他には挙げないが、人々がよく知る次の歌などはその典型だろう。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
(小野小町『古今和歌集』巻第2、103)

2 桜以外の花と女性の比喩

女性を花に譬えるという点で忘れてはならない歌謡表現の一つに、

立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花

というものがある。これは現在でも都々逸の一つとして伝えられ、寛政末年頃(1800年前後か)迄には成立したとされる『譬喩尽』(俗諺などを集めた書物)には「立てば芍薬、居^{とと}すりや牡丹、歩行姿は百合の花」とあるが、すでに『延享五年小哥しゃうが集』には「立^{たて}ば芍薬座れば牡丹、歩^{あゆく}く姿は百合の花。」という形で掲出されており、江戸中期には歌謡として流通していたとみられる。近世に至れば女性を花に譬えるのに、必ずしも桜ばかりでなくとも良くなっていたわけだ。これは、歌謡表現は必ずしも文芸伝統に縛られることは無かった、と言い換えても良い。むろん日本の驚くほど豊かな自然には様々な花木が存在し、春夏秋冬の折々にはそれらの花が次々と咲き誇って人々の目を奪うから、美しい女性の比喩として聞き手に理解されれば、どんな花を用いても良かったわけだ。しかし芍薬にしても牡丹にしても中国から渡って来て、特に江戸時代以降盛んに栽培され、品種改良された花卉である。豪華で艶やかな花態が女性の比喩として喜ばれたのであろうことは想像に難くないが、古い時代から日本にある花ではなかった。

近世期には他にも、

奥山の^{こさうとめ}小早乙女 ^{とち} 椽に花が咲いたか
咲いて候咲いて候 八重に花が咲いて候
あいらし こそゑに花が蓄うだ (下略) (『田植草紙⁵』朝歌三番)

5 安芸・石見地方に伝わる花田植に伴って歌唱される歌謡を記した田植歌本。中世から近世にかけて成立した歌の数々を記してある。

梅むめや桜さくらは七重ななむねも八重やえむねも なぜに野菊のぎくは一重いちむね咲く (『山家鳥虫歌』)
 さても見事みごとな御手洗みたらひ 躑躅つとむ 晩ふゆに蓄たくわみて夜中よなかつに開ひらく 夜明よあけけがたには
 散ちり散ちりと ヨイヤナ (『山家鳥虫歌』)
 里さとの鶯うす梅うめをばわすれ となり屋敷やしきの桃ももの枝えだ (『鄙廼一曲』⁷)

のように、いかにも山村や田舎暮らしを思わせる女性の比喩が出現する。ここで特に注目したいのが、躑躅である。

躑躅を女性の比喩として用いるのは珍しい。『万葉集』では柿本人麻呂の作にたった2首⁸出現する。

物思おもはず 道行みちゆき行く行ゆくも 青山あおやまを 振りさけ見れば つつじはなにほえ
 娘むすめ子こ 桜さくら花はな 栄さかえ娘むすめ子こ 汝なれをそも 我われに寄よすといふ 我われをもそ 汝なれに寄よす
 といふ 荒山あらいも 人ひとし寄よすれば 寄よそるとぞいふ 汝なれが心こころゆめ
 反歌

いかにして恋止むものぞ天地の神を祈れど我や思ひ増す
 (巻第13、3305・3306)

反歌があることで、この長歌に出現する「娘子」は人麻呂の恋人であることが明白である。ここでは「つつじ花にほえ娘子 桜花 栄え娘子」(躑躅の花のように美しい娘よ、桜の花のように栄える娘よ)と、恋人を躑躅と桜に譬えるが、もちろんこのツツジは山に咲く山ツツジであると考えられると同様に、桜は山桜であろう。「多数の花弁が咲き誇るように華やかに栄える娘よ」と褒め讃えて呼びかけているのである。ここでは躑躅は桜と同格の比喩であるのに留意したい。というのは、『古今和歌集』以降の平安朝の和歌集には、躑躅(岩躑躅も含む)の花を明確に女性に譬えた例が見当たらないからである。もともと女性の比喩として躑躅を用いる例は少ないのだが、どういいうわけか平安時代になってその姿を消した比喩が、近世になって姿を現しているのである。

6 御手洗は大分県大分市大字松岡の字名。

7 菅江眞澄著、文化6(1809)年頃成立、天明初年から文化初年まで著者が涉獵して書き留めた東日本の民俗歌謡集。

8 もう一首は3309番歌、ほぼ同一の表現を示す長歌なので本稿では省略した。

3 「向い小山のがんけのつつじ」

現代文明の表層にはもう浮かんでこない、伝統的・無意識的な習慣・習俗や、古代の感受性や儀礼・芸能の残滓が思わぬ所に残っているのを発見するのは、民俗学の探訪調査における醍醐味の一つと言って良いのだが、平成3（1991）年8月11月の二回に涉って、福島県伊達郡梁川町山舟生（現伊達市梁川町山舟生）において行った民俗歌謡調査では、全国でも有数の麦作地域としての必然からか、独特な夜麦搗きの習俗にかかわる多数の麦搗き歌が採集できた。当該の調査における夜麦搗きの習俗については、すでに詳細に報告してある⁹が、全てに機械化が進んだ現在の農村では聞けなくなった、労働に伴う民俗歌謡を歌える方達が、その頃はまだ多数存命だったのである。そこで得られた民俗歌謡の歌詞に

向い小山^{がんけ}の崖のつつじ お呼びなれば 見て暮らす
（明治36年生まれ、当時88歳の佐藤喜助氏歌唱）

というものがあつた。「つつじ」はご本人から明確に「美人のたとえ」だとうかがっている。

この地区での夜麦搗きは、文字通り、収穫した大麦を夜になって脱穀する作業のことを指すが、実は単なる労働ではなく、若い男女の出会いの場として有効に機能していたことが、かつてそれを経験したお年寄り達から聞き取ることが出来た。「相搗き」と称して男女が向かい合つて、搗くのである。そこでは男女の性愛にかかわる歌詞も沢山歌われたという。佐藤氏は他にも

娘十六七は してもしたがる針仕事 今朝もしてきた寺参り
島田娘と垣根の芋は 掘られながらもからみつく

のようなバレ歌（性愛を露骨に表現する歌）を披露して下さつたが、このような露骨に性愛を示唆する歌詞は、田植えや麦搗き、白曳きや土搗きなどの、集団で行う単調な労働に飽きた頃に歌われるのが通例であつた。それはバレ歌が一同に笑いを生じさせるため、作業に再び活気をもたらす役目を負つたので

9 「夜麦搗きの習俗と歌謡—福島県伊達郡梁川町山舟生地区民謡探訪調査より—」（『獨協大学教養諸学研究』第27巻第2号、1993年3月）

ある。

「向い小山の崖のつつじ」の歌詞は、若い女性も参加する夜麦搗きで女性を「つつじ」と讃えてみずからへの「お呼び」を促す、男性の立場からの表現である。「つつじ」からお呼びがかからなければ、それは「見て暮らす」しかない対象なのであった。つまり、向いの山の崖に咲くツツジは言わば高嶺の花、普通は手の届かない存在なのだ。

「向い山の〇〇」と表現する対象は花に止まらない。たとえば右の佐藤喜助氏は他に

向い小山のがんけのうさぎ 親も跳ねれば子も跳ねる
 という歌詞も歌っている。これには特に性愛に関する暗喩はなさそうだが、「向い山の〇〇」というのは、歌謡の定型表現の一つだったようだ。近世期には他に

むかいなる笹原は 楼しゅでんか主殿作りか
 楼でもない 主でもない さも寝よい笹原
 たたみより篠ささ原が寝ようて (下略)
 (『田植草紙』晩歌四番)

向ひの山の葛の葉 何を招く葛の葉 吹き上げて吹きおろし
 それを招く葛の葉 (『鄙廼一曲』)
 むかひの山の百合の花 つぼんでひらいて 葉ひろげた
 (『鄙廼一曲』)
 むかひの山のつたの葉は 縁でなければ からまりやほぐれる
 (『鄙廼一曲』)

向ふの御山で何やら光る 月か蛍か夜這星か
 月でもないが星でもないが 姑婆の目が光る目が光る
 (『童謡古謡』¹⁰)

等の歌謡が記され、現代でも、

向かい山で ぴっかり光るは 月か星か 蛍か
 月でもないし 星でもないし 忍び男の煙草の火

10 浅草に住んだ修験僧行智による童謡の書留。文政3（1820）年成立。

(岩手県江刺市(現奥州市江刺区)玉里地区の田植歌)
向い山で 蕨折るるは 嫁か娘か
嫁なら抱いても寝るが 人の嫁なら それえ出来ねえ
(岩手県江刺市(現奥州市江刺区)米里地区の田植歌)
(以上二首は『歌のちから—岩手県旧江刺郡の民俗歌謡資料と研究—』¹¹より)

というように伝承されていた。いずれにせよ、「向い山」を望む生活、つまり山がちな土地での暮らしを日々生きる人々によって生み出された表現であろう。

ただし、ツツジ自体は江戸時代には都市生活をする庶民にも身近な花(園芸品種)として親しまれていた。『江戸名所図会』には大久保百人町で栽培されていた霧島ツツジが紹介されている。(次頁写真・詞書参照)

これを見ると、一面にツツジが咲き誇っており、詞書には「映山紅」に「きりしま」と振り仮名をしてあるから、画面で紹介されているツツジは園芸品種である霧島ツツジであると知られる。霧島ツツジは小さめだが真紅の花が密集して咲く品種で、詞書にもあるように花が枝や茎を覆って見えなくなるくらい多数咲くのが特徴である。

訪れているのは奥女中らしい一団で、茶坊主らしき人物が茶席を仕立てて迎えており、席の向こう側では園主達が出迎えている風情である。

いずれにせよ、ツツジは江戸期には都市生活をする一般庶民にも親しい花として知られていたはずなのだが、女性の比喩としてはほとんど登場していない。同じ園芸品種である芍薬や牡丹の比喩が人口に膾炙するのと比べれば、そこには大きな違いがある。

この理由はよく分からない。遠く飛鳥時代の歌人柿本人麻呂の歌と江戸時代の俗謡と現代の民俗歌謡にぼつんぼつんと、それこそ山中に独り一樹が生い立つように、ツツジの比喩は時代を超えて、あるいは時の流れの底に密かに身を沈めるようにして隠れながら時折姿を水面に現したように、歌謡の中にひっそりと息づいていたのである。

11 平成元年より14年にかけて岩手県旧江刺郡地域(現北上市の一部と奥州市江刺区と同水沢区の一部)全域にわたって実施した民俗歌謡調査の記録と研究。(國學院大學日本文化研究所編、瑞木書房刊、平成15(2003)年)

『江戸名所図会』（天保5（1834）～天保7（1836）年刊）より



《詞書》

おおくほ きりしま
大久保の映山紅は
やよひ さかり
弥生の末を盛とす
あまた
長丈余のもの数株
ありて そのこうえん
其紅艶を愛
ともから くんい
するの輩ごとに群遊す
くわきやうちいざし
花形微少といへとも
むらか ひらき かく
叢り開て枝茎を蔽す
まんでいくれない ぞく
さらに満庭紅を灌
こと ゆうひ えい
か如く夕陽に映して
きんしう はやし
錦繡の林をなす
さうくわん
此辺の壮観
なるへし

そのような例としてもう一つ挙げられるのが『東京風俗史』下巻（平出鏗次郎著、富山房刊、明治35（1902）年）に記された、当時の東京で流行した磯節の歌詞である。

山で赤いのが躑躅に椿、サイシヨネ、咲いてからまる藤の花、咲いて
ネ、からまる、イソ、藤の花、テヤテヤ。

これは一見単なる叙景の表現のようであるが、磯節がもっぱら花柳界で歌われた（もともとは茨城県大洗の遊郭で歌われたものが東京に流入した）歌であることを考えると、明らかに紅灯の巷で咲く花の比喻であることが察せられる。

4 彝族と映山紅

中国雲南省・四川省・貴州省に広がって暮らす彝族は、中国語では映山紅あるいは杜鵑花とも馬櫻花とも躑躅とも表記する花、シュオマを特別な花として扱っているという。松岡格はその中でも四川大凉山彝族について

古彝文経典以外に、文字化されなかった民謡や伝説の内容からも、植物の中でも高山ツツジ（シュオマ）が特別な地位を与えられていることが確認できる。

と述べている¹²。また、

大凉山彝族の重視する「シュオマ」（shuox-hma）というのが高山に咲くツツジ一般の総称を表している

とも記していて、シュオマが高山性のツツジ一般を示しているとする。

本稿の筆者が接した彝族は主に四川省西昌を中心とする凉山彝族自治州の人々であったが、彼らに尋ねてみると、確かにシュオマは主に石楠花を指すが、いわゆる岩ツツジの類も含む、高山に咲く赤い花（時には白い花も交える）全般を指すようである。

石楠花は植物分類学上はツツジ目Ericalesツツジ科Ericaceaeツツジ属Rhododendronシャクナゲ亜属Hymenanthesに属し、確かにツツジの中に属している。日本では石楠花と躑躅、臯月を分けて考えることが多いが、実はすべてツツジ目ツツジ科ツツジ属の植物で、その点では彝族のシュオマはツツジを

12 松岡格「原住民文化の奥深さ—花文化研究からのアプローチ」（『台湾原住民族の音楽と文化』所収、草風館刊、2013年）

指すと考えても良いようである。日本の「崖のつつじ」はその中でも山中にぼつんと咲く山つつじを指すのであろう。

四川省の省都である成都の西南民族大学の彝族の学生に尋ねると、女性を讃える比喩としてのシュオマは、歌好きの彝族が普段歌う歌詞の中に沢山出てくると言う。女性をシュオマに譬えたら、それは最高の褒め言葉だとも聞いた。

そこで、西南民族大学民族文献中心に所蔵されていた彝族の歌謡集の中の七冊¹³から、女性をシュオマに譬えている表現を探してみた。しかし、筆者は彝語が読めない。歌謡集の中には彝文字で歌詞を表現し、それを直訳（彝語も中国語と同じ語族に属しており、それが可能のようである）し、さらにこなれた中国語（普通話）訳で示す、というような丁寧な本もあったが、もっぱら筆者の貧弱な中国語力に拠って、中国語訳の歌詞から探すという調査であったので、前提として不十分なのはお許しいただきたい。代表的なものは下の通りである。

男： 山高馬櫻花
映山紅滿山
好花在山頭
山歌堆山梁

女： 山大梁弯弯
箐深水汪汪
没串大地方
山歌不会唱

男： 妹住高山水秀庄
映山紅来紅滿山
春夏秋冬鵲雀叫
山清水秀出鳳凰

13 『原生態彝族民歌』（沙馬拉毅收集・整理・翻訳、孫国英責任編輯、四川民族出版社發行、2009年）『盤県彝族古歌』（盤県彝学研究会編、四川民族出版社發行、2004年）『哀牢山彝族情歌』（張海英責任編輯、雲南民族出版社發行、1996年）『禄武彝族歌謡選』（禄勸彝族苗族自治县民族宗教局編、張仲仁責任編輯、雲南民族出版社發行、2002年）『哀牢民歌』（南華県民族宗教局編、中国国際文化出版社、刊年不明）『南詔故地的歌謡和諺語』（巍山県人民政府編、民族出版社刊、刊年不明）『雲南彝族歌謡集成』（雲南省民間文学集成編輯弁公室編、雲南民族出版社刊、1986年）

女： 妹家住的可怜村
山窮水悪難種糧
春来燕子不回家
哪会飛出金鳳凰

(『哀牢山彝族情歌』四大腔对唱、海棠腔より)

男： 对門看見映山紅
小小蜜蜂飛来落
胡蝶先把花密采
蜜蜂空飛氣已脱
女： 映山紅来満山紅
春風不吹她不開
好花要等貴人来
好花等着貴人采

(『盤県彝族古歌』对唱より)

「映山紅満山」や「映山紅来満山紅」はいわば決まり文句で、これらはいわゆる「山歌」(岡や山の中腹で男女が交互に想いを歌い合う歌)の男女对唱の場で歌われる。その意味するところは表面上は満山に映山紅が咲いたと言いながら、実は集まってきた女性達が美しいと讃えているという点にある。女性達はみずから客観的に「映山紅来満山紅」と表現しているように見えるが、実は「春風が吹かないと花は開かない」「綺麗な花はあなたがやってくるのを待っている」と表現して、男性に対して気があるところを見せているのである。

彝族の女性の比喩として用いられる花は、他にも石榴や**葎花**(燕麦の一種の花) 核桃花(クルミの花)等があるが、やはり映山紅・杜鵑花・馬櫻花と記されるツツジが一番多いようである。

5 まとめ

日本歌謡と彝族歌謡における女性の比喩表現としての花を比較するというのが当初の目的であったが、彝族が重要視し、歌謡表現にも女性の比喩として用いられるツツジの表現が、日本では意外に少ないということが分かった。しかも人麻呂の時代には存在したツツジの比喩が、平安時代には伏流してしまい、近世・近代に至るまでその姿を現さなかったことも知られた。

映山紅とツツジがそれぞれ美しい女性の比喩として成立すること自体には、彝族文化と日本文化に共通の感覚ないし価値観が存在することを暗示するが、日本におけるその数の少なさをどう理解したら良いだろうか。もしかしたら、単に山がちな地方に住んでいると、たまたま向いの山の中腹にポツンとツツジが咲いているのを見ることが多い、ということだけかもしれない。あるいは両者が元々持っている文化基盤の根底に刷り込まれている価値観なのかもしれない。現在の所はそれ以上何も言うことが出来ない。

※西南民族大学民族文献中心にて資料調査の便宜を図っていただいた羅慶春彝学学院院长、同大学彝学部の学生の皆さん、また現地調査で色々教えていただいた沢山の方々に心よりお礼を申し上げます。

※本文中で特に触れていない引用の典拠については、下の通り。

『山家鳥虫歌』『田植草紙』『鄙廻一曲』『童謡古謡』『古今和歌集』 …新日本古典文学大系
『譬喩尽』 …『たとへづくし—譬喩尽』(同朋社刊)
『延享五年小哥しゃうが集』 …続日本歌謡集成 卷三 近世編上
『東京風俗史』『江戸名所図会』 …ちくま学芸文庫

中国語要旨

一朵開花在对面山上

一在日本歌謡和中国少数民族彝族歌謡中花朵表现一

在日本的文學傳統中，比較女性和花卉，花朵往往是櫻花。然而，一個特殊的情況隱喻女性作為杜鵑在“萬葉集”的柿本人麻呂的長歌。而且，平安時代以後，這個例子就消失了，說到花，就變成了櫻花。所以，你可以看到例子，在民間傳統的現代，把女人解釋為杜鵑花，儘管數量不多。

中國的一個少數民族彝族有照顧高山杜鵑花的文化，但是他們有表達的傳統，把女性的美貌改寫成杜鵑花。日本和彝族的文化有共同的隱喻之所以可能是因為在山區有生活。

